

クメール・ルーヂュがいたタイ国境付近のカンボジア事情その2 カンボジア西部の変貌

大久保泰邦

2014年、私はカンボジアを含めたASEANにおける鉱物資源データの収集と編集をするために、プノンペンを訪れた。そこでソタム氏とほぼ20年ぶりに再会した。彼は我々の案内役を務めてくれることになったのである。

私はその時初めてソタム氏の笑顔を見た。彼と会ってから何日が過ぎると、忘れ去りたいはずの悲惨な過去も私に話してくれた。この20年で彼は過去の悲劇を克服し、冗談を言う陽気な人へと変わったのであった。平和と繁栄が彼をそうさせたのだと思う。

トンレサップ湖

カンボジアの首都プノンペンは、メコン川とその南を流れるトンレサップ川の合流点に位置する。雨季になればメコン川は増水し、川沿いは洪水になる。しかしプノンペンはトンレサップ湖が自然の貯水池となって洪水を防いでいる。



右の川がメコン川、左上に辛うじて見える川がトンレサップ川。北西方向を見て撮った写真で、プノンペンの町は後ろに位置し、そこで二つの川が合流する。

トンレサップ湖は、乾季の間、水深は1m程度に留まり、面積は2500平方km（琵琶湖の4倍程度）である。しかし5月半ばから11月半ばの雨期にはメコン川の水量が多くなり、その水がプノンペンの合流地点からトンレサップ川に逆流する。その水はさらに川上のトンレサップ湖へと向かい、周囲の土地と森を水浸しにしながらか水嵩が増加する。トンレサップ湖の面積は拡大し約6倍、1万6000平方km、深度も9mに達する。



プノンペン、トンレサップ湖、メコン川、バタンバン (ウィキペディアより)

この面積拡大によって淡水魚には陸上植物起源の有機物が豊富に供給され、多量のプランクトンが発生し、魚が大量に発生する。体重 100kg を上回るメコンオオナマズやフグなど 600 種類以上の淡水魚が生息する。雨季の終わりには水が引き、繁殖を終えた魚は川下に移っていく。トンレサップ水系で採れる魚は、カンボジア人のたんぱく質摂取量の実に 60% を占める。



トンレサップ湖で獲れた魚。(バタンバンにて 2015 年 9 月 21 日撮影)

またトンレサップ湖周辺地域は農業に適した耕地となっている。トンレサップ湖から水が引くにつれ周囲に養分に富む堆積物を残すため、雨季以外には重要な農地が拓け、浮き稲などが栽培されている。



肥沃なトンレサップ湖周辺で採れた野菜。(バタンバンにて 2015 年 9 月 21 日撮影)

拡大縮小を繰り返すトンレサップ湖周辺に住む人々は筏を作りその上に家を建て、湖岸が移動するとそれとともに家ごと移動する。学校も店も散髪屋も交番もガソリンスタンドもカラオケ屋も結婚式場もみんな一緒に移動する。

このようにカンボジアの中央に位置するトンレサップ湖は、その周辺の地域を豊かにしている。



トンレサップ湖の水上生活。（2004年1月22日撮影）

カンボジア西部の繁栄

ポル・ポトが逃げ込んだカンボジア西部は、トンレサップ湖の豊富な水産物に恵まれ、肥沃な農地が広がる地域である。今ではキャッサバ畑とトウモロコシ畑が広がっている。さらにタイとの国境付近に行くと、国境沿いに走る完成したばかりの2車線の舗装道路に突き当たる。その道を北上すると、ところどころにパスポート無しでもタイ側へ渡ることができるチェックポイントがある。そこにはホテル、カジノ、商店が立ち並び、大勢の人々で賑わっている。何が起きているのだろうか？

ここは以前ジャングルが広がり、クメール・ルージュ軍の拠点だった事から1990年代後半まで激しい戦闘が繰り広げられ、多くの地雷が埋められていた。しかし日本をはじめとする多くの国々が地雷除去支援活動を行った努力で、次第に農地へと変貌した。



カンボジア西部に広大な農地が出現した。（2015年9月23日撮影）



カンボジア西部は地雷除去が進み、ジャングルが農地となっていた。しかし開墾されていない丘の上にはまだ地雷がある。（タイと国境を接するパイリン州北部にて2015年9月22日撮影）

タイ国境で活動するタイ人流通業者はこの地に目をつけ、キャッサバとトウモロコシの栽培を始め、タイに飼料用として輸出をするようになった。特にタピオカでん粉原料となるキャッサバの生産量が急増した。近年は中国からのエタノール原料としての需要も増加しており、2012年から中国への輸出も行われており、さらなるキャッサバの生産拡大が見込まれている。



カンボジア西部に広がるキャッサバ畑。（2015年9月23日撮影）

カンボジア側にはタイへの輸出用の飼料を作る工場が点在する。そのオーナーは間違いなくタイ人である。チェックポイントでは新しい建物や道路が建設されている。その建設用骨材は近くの採石場から取り出している。その採石場のオーナーもタイ人である。チェックポイントにはホテルやカジノがあるが、その客の大半もタイ人である。



チェックポイントにあるカジノ。（Phsar Prumにて2015年9月22日撮影）

道路は、中国がカンボジアにローンとして貸し付けた資金で建設されている。建設業者は中国からやってくる。



中国の建設業者が作ったパイリンとバタンバンを結ぶ道路。（2015年9月23日撮影）

カンボジア西部はカンボジア人、タイ人、中国人で賑やかである。タイ人はジャングルを開拓して広大なキャッサバ畑やトウモロコシ畑を作り、それをデンプンに加工して、牛や豚の飼料としてタイに輸出する。中国人は国境を越え、ラオス、タイ、ミャンマー、カンボジアのインドシナ半島の国々に繋がる道路を建設し、その道路を産業、観光に利用して、強い経済圏を作ろうとしている。その経済圏はもうすでに出来上がったと言える。

たくさんの大型トラックがカンボジア西部の産物や交易品をカンボジア内部へ、中国企業が作った道路を使って運んでいる。途中では何か所か警察による検問があった。不法輸入、不法輸送の取り締まりと聞く。

しかし日本人は全くと言っていいほどいない。日本は、カンボジアやラオスの地雷、不発弾が埋まっている地域には立ち入らないように警告している。その代わりに日本は国際貢献として地雷除去技術を開発し、地雷除去に専念している。

しかし一方で地雷や不発弾の存在に関わりなく、中国やタイは開発をどんどん進めており、道路やホテルを作るなどの物理的な経済協力がもうすでに出来上がってしまっている。その点日本は完全に乗り遅れている。

カンボジア人とタイ人に中国人に対する感情を聞いたことがある。その答えは中国人に対してどちらかと言えば好感を持っているとのことであった。インドシナ半島に住むタイ族、ビルマ族、ラオ族は中国南部からの移住者である。彼らの反中国感情はそれ程大きくない理由はここにあるとも考えられる。

むすび

日本人はカンボジア西部の繁栄を知らない。カンボジアはタイ、中国と協力して急ピッチで発展している。このことを教えてくれたのは、ASEANにおける鉱物資源データの収集と編集の案内役を務めてくれたソタム氏であった。



ASEAN 鉱物資源データの収集と編集プロジェクトに集まった国際チーム。前列右から二人目がソタム氏、中央やや左の赤シャツ姿が著者。（2015年11月8日撮影）

この地の情報はインターネットにも無く、日本にはほとんど届いていない。しかし我々が知らない間にもうすでにカンボジア、中国、タイの友好的な協力関係によって開発がどんどん進んでいるのである。この状況を見ると、ASEANにおける日本の役割は何なのか考え込んでしまう。

日本人はこの状況を良くわきまえて、国際戦略を進めるべきと感じるのである。